

---

# 血も涙もなく

須江

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血も涙もなく

### 【コード】

N3585P

### 【作者名】

須江

### 【あらすじ】

B L、微エロ注意。いわゆるセフレな2人。それ以上でもそれ以下でもない、ならない。ミニトマトがウサギの眼のように睨み付けてくることはないように。

「きらい」

サラダの中からそれを見つけた途端、バーニイは露骨に顔をしかめた。目玉焼きをつついていたロイが首を傾げる間に、綺麗な指が真っ赤なミニトマトをつまみだす。実に触れるのも嫌だと言わんばかりにヘタでぶら下げ、既に空となったロイのサラダボウルに投げ入れた。

「好き嫌いはよくないぞ」卵の黄身をフォークで潰し、ロイは子供へ言い聞かせるような声を出した。実際、10センチ以上背が高いロイがバーニイに話かけている様子は、まるで兄と弟のように見えただ。バーニイが唇を尖らせそっぽを向くと余計格差は広がる。

「嫌いなものは嫌いなんだ」

「嫌いとか好きとかの次元の食べ物じゃないだろう」

ロイはフォークでミニトマトを突き刺した。水っぽく赤い汁が銀色の金属を垂直に流れ落ちる。なぜかデジャビュを覚えた。しかもついさつき。しばらく考えて、あっさり思い出す。

ついさつき、車の中で目の前の男を抱いたとき、慣らし足りず少し出血していた。車に乗り込んでくるなりいきなり腕をロイの首に腕を回しセックスを要求してきたのだから仕方がない。いつでもバーニイは、自らの快感を追うのに時間をかけることを望まない。甘い言葉を囁くなんて男同士では無意味だと分かっているのだ。その暇があるなら、快樂を貪ることに専念する。確かにろくに慣らしもせず挿入されて痛がってはいたが、それもまたスパイス。構わず押し進めたら、最後はロイの首にかじりついてすすり泣いていた。もちろん快樂のせいだ。

腹が減ったと言うので近くにあったこのダイニングに連れてきたが、バーニイの食は言うほど進んでいなかった。食われるのはお前の方じゃないか、とロイは思った。まだ情事の余韻を体に残すバーニイ

は滴るような艶を発散していた。びっしりと濃いまつげを気だるげに伏せ、頬杖をついている姿を見たら、あつという間に女が近寄ってくるだろう。そもそも普段から色男の名に恥じず、バーニイは女にもてるし遊ぶのは好きだった。男も同様だが、女の前では軽蔑の表情を浮かべて言う。

「ホモ？よせよ気持ち悪い」

取り繕うのが面倒臭く、かと言って自らの性癖をさらす気もないロイが「二枚目だが色恋には興味がない変り者」を貫いているのとは大した違いだった。精力的な活動で墓穴を掘る日が来ないことをロイはいつも祈ってやっていた。自分の地位まで巻き添えにされるのは困る。

「だって、それって似てるだろう」

敢然とロイが口に入れるトマトをにらみ、バーニイは言った。

「ウサギの眼に」

思わず歯で噛み砕くのを躊躇してしまふ。ロイが浮かべた嫌悪を更に煽るよう、バーニイは言葉を続けた。

「ウサギの眼も、潰したらそういう色の汁を出すんだ」

「潰したことあるのか？」

まだトマトを口の中に残したまま、ロイは聞いた。青臭いだけだった野菜に、心なし鉄の味が加わった。

「あるよ、昔」

事もなげにバーニイは答えた。

「俺の田舎は山の近くだから。11の時都会に出てくるまで、お袋はよくウサギのシチューを作ってた。さばくのは俺の仕事だったんだ」

もう数え切れないほど寝ているにも関わらず、バーニイの口から昔の話の聞くのは初めてだった。彼らが話すのはもっぱら今のことで、例えば見た映画、仕事の話。過去は関係ないし、未来などあるわけではない。本当のことを言えば、ロイはバーニイの生い立ちになど興味がなかった。ただ話を続けるバーニイが生き生きとしているのはい

いと思った。輝いているし、美しい。相槌を打っているだけでこの美しさを鑑賞できるなら、まあ安いものだろう。

「ウサギは殺される前、キィキィ鳴いてこっちを見るんだ。声も顔も、すごく悲しそうで。見たくないから眼を潰すんだけど、それが嫌な感触で、しかも悲鳴がすごい」

身震いする真似をして、とうとうバーニイはフォークを投げ出した。「それ以来、あの目を思い出すたびぞつとする」

「ウサギの肉は食べられるのに？」

潰れてきたトマトを舌で押しやり、ロイは言った。バーニイはまた、あの色つばい眼でロイを睨む。

「お前は情緒がないよ」

バーニイがその言葉を口にしたことに腹が立って、ロイは足を持ち上げた。冷めたコーヒーを啜っているバーニイの股に、爪先を突っ込む。顔色が変わったのを確認し、ロイは端整な顔に笑みを浮かべた。

「そうかな」

ゆっくりとテーブルにカップを戻したバーニイは、やめるよ、と小声でたしなめた。指先が微かに震えている。ロイは構わず、足に力を込めた。

「じゃあ今から二人で美術館でも行って、感性を磨こうか」

「仕事は？」

「今日は休みだよ」

一番奥の席で周りからは見えないことを、バーニイは知らないのかもしれない。赤く染まった頬を隠すようつつむき、唇を噛みしめる。「君もだろう？」

「でも八時に兵舎へ戻らないと」

口籠もつたのは、熱を持ち始めた自らのものに恥じているからだろう。上目遣いで訴えてくることを、ロイは意地悪くわざと無視した。

「大丈夫だろう。まだ昼前だし、見学して、夕飯を食べても十分間に合う」

「けど」

「それとも、何か他にしたいことが？」

鋭く睨み付けるバーニイの股間を間髪入れず踏みにじれば、あ、と小さく吐息が漏れる。庇うようにしていくらか身を丸め、ついにバーニイは涙まじりの声を出した。

「やめて、ロイ……」

「美術館に行くのを？」

「ちがう、そうじゃなくて……いやだ」

手をテーブルの下に潜り込ませ、何とか押し退けようとする。靴に指が触れる前にまた爪先を動かしたから、びくりと身体が震えた。

「こんなところでいやだ。今日は一日、するんだろう」

「何を」

「何って」

ロイの言葉に、バーニイはしばらく迷ってからぼつりと言った。

「ファック」

自らがそう言えば、相手が従うとバーニイは知っている。求めていることは同じだと言外に言われた気がして、ロイはなんとなく虚しくなった。間違っていないところが笑えない。

「それなら仕方ないな」

さっさと足を引っこ抜き、ロイは伝票を掴んだ。ほつと息をついたバーニイを指先で招きよせ、不思議そうに近づいてきた顔を片手で捕える。乗り出す格好のキスはバランスが悪く、下手に振り払ったら物音を立てて周りの注目を集めてしまう。バーニイは一瞬硬直したが、ロイの舌が唇を舐めると驚いて薄く開き、つい迎えいれってしまった。上顎を擦られ歯を辿られ、うっとり鼻から抜ける息を出した自らに赤面している。その隙に、ロイは相手の腔内に皮だけになったトマトを押し込んだ。

顔を離すと、案の定バーニイは意味がわからないといった表情を浮かべた。正体には気付きもしなかったのかもしれない。飲み込んだ際こくりと上下した喉仏に、ロイは欲情した。

「ならさつさと他の場所へ行つて、しようじゃないか」  
ファックを、と去りぎわにこれ以上ないほど整った笑みと共にバー  
ニイの耳元へ吹き込む。予想通り、バーニイはたった今口にした実  
以上に顔を赤く染め上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3585p/>

---

血も涙もなく

2010年12月7日15時58分発行